福岡県立大学人間社会学部紀要
2011, Vol. 20, No. 1, 61－69

きょうだいに対する劣等感と養育態度の認知との関連

大和美季子[1)]・吉岡和子[2)]

要約　本研究では、自分ときょうだいに対する親の養育態度の差異ときょうだいに対する劣等感の関連を、質問紙調査によって検討した。

研究１より、親から過干渉的に育てられたと認識していることによって劣等感が強くなる傾向にあると考えられた。研究２から、内面的な劣等感項目において、きょうだいよりも、親に愛情を注がれなかったと認知している者はきょうだいに対する劣等感が高いことがわかった。比較対象が兄、姉であると、いくつかの項目において劣等感が高くなる傾向があった。〈友達づくりの下手さ〉については年齢差が０～２歳より３～４歳の方が、劣等感を感じやすいことが窺われた。研究３より、内面的な劣等感項目において、きょうだいよりも、自立的に育てられなかったと認知している者はきょうだいに対する劣等感が高くなると考えられた。兄と比べた場合に一部の項目で劣等感が高くなる傾向がみられたが、きょうだいとの年齢差については関連がみられなかった。

キーワード：きょうだい　劣等感　養育態度

問題と目的

きょうだい関係

きょうだいがいる者なら、きょうだいに対して嫉妬心や劣等感などをもったことがあるだろう。

きょうだい間の問題は、古くは旧約聖書にも記載されている。「カイン・コンプレックス Cain complex」とは、この話から導かれた概念であり、両親の偏愛、きょうだいへの羨望と憎しみ、きょうだい殺しなどの同胞葛藤を意味している。カイン・コンプレックスを題材にした小説や映画は多く、近年では「ゆれる」という映画が大きな注目を集めた。私たちにとってそれだけ身近な問題ということだろう。

きょうだいは身近な存在であるゆえに比較されることが多く、それ故他者に対してより負の感情を抱きやすいと言える。弘田（2009）の研究でも、親が持つ好意の程度や「ひいき」等により、子どもがきょうだいに対する劣等感や敵意という感情を体験することがわかっている。さらに弘田は、親の期待によりきょうだいへの敵対的感情が抑圧されることで、無意識の葛藤が核となり、さまざまな心の問題をおこすこと

１）　福岡県立大学大学院人間社会学研究科修士課程１年
２）　福岡県立大学人間社会学部講師

もあると述べている。

こうしたきょうだいに対する負の感情と、期待される友愛的関係の間で生じるジレンマを同胞葛藤という。藤永（2004）は同胞葛藤が強すぎると、きょうだいへの強い否定感情、退行、睡眠障害、親に対する反抗的行動等をとることがあるという。これを同胞葛藤障害という。

劣等感ときょうだい関係

きょうだいへの同胞葛藤障害により、殺人事件にまで発展してしまうことも少なくない。これはきょうだいへの劣等感を克服しようとした際、自ずと生じる優越欲求により劣等感を克服しようとする「劣等感の補償」が起こる為といわれている（斉藤，1975）。斉藤は、劣等感の補償がきょうだいへの攻撃欲求に繋がることがあると言っている。この攻撃欲求が、ひどいときにはきょうだいに対する殺意になるのだろう。しかし劣等感を持つことが問題というわけでなく、劣等感にこだわりとらわれてしまうことで自己が脅かされることが問題なのであると、佐々木（1984）は指摘している。その為、劣等感を抱いた際は、この劣等感に伴うひがみ等を持たないようにし、これをどのように自分の力に変えていくかが重要となると考える。

親の養育態度ときょうだい関係

また、親の養育態度もきょうだいの関係に重大な影響力を持つだろう。弘田（2009）も、きょうだい関係は親子という「縦」の関係と、きょうだいという「横」の関係が混ざり合いながら展開する為、親の養育態度により、子どもの内面やきょうだい関係は大きく変化するだろうと言う。及川（2005）の研究では、親から受けた被養育体験が、子どもの親性の発達にまで影響を及ぼすことがわかっている。親の差別的な育て方や不公平な愛情が正常なきょうだい関係を歪めてしまい、一生とりかえしのつかない状態に陥らせてしまう原因となることさえあるのだ（斎藤，1975）。

確かに子どもの性格の違いによっては、無意識できょうだい間に養育態度の差をつけてしまうかもしれない。しかし、子どもが頼らざるを得ないのが親であり、親の何気ない行動が子どもにとっては重大な意味を持つことを親は理解しなければならないだろう。

本研究の目的

本研究では、自分ときょうだいに対する親の養育態度の差異によって、きょうだいに対する劣等感がどのように変化するのかを検証する。仮説は以下の通りである。

1）Care得点が低く親に愛情を注がれなかったと認知している者は、劣等感を感じやすい。また、Over-Protection得点（以下、OP得点）が低く、親に自立を促すように育てられたと認知している者は、劣等感を感じにくい。その為、冷淡と干渉（Lh）＞無関心（Ll）＞情愛と過保護（Hh）＞情愛と自立承認（Hl）の順で劣等感が高いと考える。

2）きょうだいよりも、親に愛情を注がれなかったと認知している者はきょうだいのほうが優れているからだと感じ、きょうだいに対して劣等感を感じる。ただし身体的魅力のなさなどの外見は、多くの評価に触れることになる為、親の評価だけに影響されることはないと考える。逆に性格の悪さなどの内面は、他者からあまり評価を受けない為、親の評価に大きく影響されると考える。

比較対象では、兄、姉と比べた群が、弟、

妹と比べた群より劣等感が高く、年齢差では、きょうだいとの年齢差が０～２歳群が、他の年齢差群よりも劣等感が高いと考える。

３）きょうだいよりも自立的に育てられなかったと認知している者は、きょうだいよりも依存心が高く、成功体験が少なくなる為、きょうだいに対して劣等感を感じやすいのではないかと考える。比較対象、年齢差は仮説２と同じである。

方　法

１）調査対象

福岡県立大学の学生と福岡大学の学生、計181名。性別による内訳は男性が32名、女性が149名であった。

２）調査時期

2009年の10月上旬～中旬

３）調査方法

講義終了後、質問紙を配布し、無記名で回答をしてもらった。アンケートの表紙に注意点として以下の点を明記した。

・アンケートの答えに良し悪しはないこと。
・調査結果は統計的に処理され、個人的な情報が漏れることはないこと。
・素直にありのままを答えること。

４）調査内容

１）劣等感

高坂・佐藤（2008）の劣等感尺度から〈家庭水準の低さ〉を除いた、７水準(〈異性とのつきあいの苦手さ〉、〈学業成績の悪さ〉、〈運動能力の低さ〉、〈性格の悪さ〉、〈友達づくりの下手さ〉、〈統率力の欠如〉、〈身体的魅力のなさ〉)各６～７項目の計43項目を用いた。この因子名は記入せず、それぞれの項目をランダムに配置した。また、きょうだいと比べることを考慮して、意味内容は変わらないように文章に修正した。

質問項目はすべて「〇〇な自分がきょうだいと比べて劣っている」という文章形式になっている。調査対象者に自分のきょうだい１人と比べて、質問が自分に当てはまるかそうでないかを５件法で回答を求めた。得点が高いほど、きょうだいに比べて劣っていると感じていることを表す。

２）養育態度

親から受けた養育態度に関する、13項目のCare得点（愛情・冷淡）と12項目のOP得点（統制・自立）から構成されているPBI尺度日本版（及川,2005）を用いた。この２分類のそれぞれの中央値を算出し、４タイプ（Hl：情愛と自立承認、Hh：情愛と過保護、Ll：無関心、Lh：冷淡と干渉）に分類する。

調査対象者に、「自分が受けた養育態度」と「自分のきょうだい１人が受けた養育態度」（劣等感尺度で比較したきょうだいと同一）について、４件法で回答を求めた。逆転項目は変換後、単純加算し尺度ごとに得点を算出した。

質問紙は、順序効果が出ないように、「①自分が受けた養育態度②劣等感尺度③きょうだいが受けた養育態度」の順で記載したものと、「①きょうだいが受けた養育態度②劣等感尺度③自分が受けた養育態度」の順で記載したものを半分ずつ被験者に配布した。

結果及び考察

研究１：自己が受けたと認知している養育態度に関する分析

研究１の有効回答数170名のうち、各得点の中央値であったデータ25名を除いた145名をHh、Hl、Lh、Llの４群に分類し、劣等感尺度

ごとに１要因の分散分析を行った。

〈運動能力の低さ〉、〈身体的魅力のなさ〉、〈統率力の欠如〉、〈性格の悪さ〉、〈異性とのつきあいの苦手さ〉、〈友達づくりの下手さ〉でそれぞれ主効果に有意傾向がみられた（順にF (3.141)＝3.49, p<.05、F (3.141)＝3.22, p<.05、F (3.141)＝9.40, p<.01、F (3.141)＝3.00, p<.05、F (3.141)＝6.97, p<.01、F (3.141)＝7.57, p<.01）。多重比較の結果、〈運動能力の低さ〉では、Hh群とLh群がHl群よりも得点が有意に高かった（順にLSD＝3.33, p<.05、LSD＝2.77, p<.05）。〈身体的魅力のなさ〉でも、Hh群とLh群がHl群よりも得点が有意に高かった（順にLSD＝2.65, P<.05、LSD＝2.20, p<.05）。〈統率力の欠如〉では、Hh群、Lh群、Ll群がHl群と比べて得点が有意に高かった（順にLSD＝2.66, p<.05、LSD＝2.21, p<.05、LSD＝2.66, p<.05）。〈性格の悪さ〉でも、Hh群とLh群がHl群に比べて得点が有意に高かった（順にLSD＝3.30, p<.05、LSD＝2.74, p<.05）。〈異性とのつきあいの苦手さ〉に関しては、Hh群、Lh群、Ll群がHl群よりも有意に得点が高かった（順にLSD＝2.99, p<.05、LSD＝2.49, p<.05、LSD＝2.99, p<.05）。〈友達づくりの下手さ〉では、Hh群、Lh群がHl群、Ll群より得点が有意に高かった（Hh>Hl:LSD＝3.01, p<.05、Hh>Ll:LSD＝3.46, p<.05、Lh>Hl:LSD ＝2.51, p<.05、Lh>Ll:LSD＝3.03, p<.05）。

〈学業成績の悪さ〉を除く全ての劣等感項目で、Hh群、Lh群がHl群よりもきょうだいに対する劣等感が高いことがわかった。〈統率力の欠如〉、〈異性とのつきあいの苦手さ〉においては、上記の結果に加えて、Ll群もHl群よりきょうだいに対する劣等感が高く、〈友達づくりの下手さ〉においては、Hh群、Lh群はLl群に比べても劣等感が高かった。有意差は出ていないものの、Hh群、Lh群はLl群に比べて、全ての尺度で劣等感得点が高くなっていた。

仮説１で挙げたLh > Ll > Hh > Hlの順で劣等感が高いという仮説は部分的に支持され、特に親から過干渉的に育てられると、劣等感が強くなる傾向があるのではないかと考えられる。青木（2002）も親の、子どもの生活全体に及ぶ目配りが、子どもの自立性の獲得に拮抗する作用となる可能性があることを示している。

〈学業成績の悪さ〉で有意差が出なかった理由として、成績は得点や順位等の目に見える形として、学校で評価されることが多い。その為、親の養育態度を、学業成績の悪さについての劣等感に結び付けて考えないのではないかと推察される。

研究２：Care得点のきょうだい差に関する分析

研究２の有効回答数159名のうち、「自分のCare得点－きょうだいのCare得点」＝０となるデータ25名を除いた135名において「自分のCare得点－きょうだいのCare得点」が自分＜きょうだいとなった者（自分低群）と、自分＞きょうだいとなった者（自分高群）に分け独立変数とし、劣等感項目ごとにt検定を行った。

その結果、〈統率力の欠如〉(t (1.132)＝3.24, p<.10)、〈性格の悪さ〉(t (1.132)＝3.21, p<.10)、〈異性とのつきあいの苦手さ〉(t (1.132)＝3.24, p<.10)で、自分低群が、自分高群と比べて有意傾向で得点が高く、劣等感が高かった。上記の３つはどちらかと言えば内面的な問題である。これらの項目で有意傾向が出ていることから、「きょうだいよりも、親に愛情を注がれなかったと認知している者は、きょうだいに対して劣等感を感じる。ただし外見的な項目より内面

的な項目できょうだいに対する劣等感を感じやすい」という仮説は支持されたと言える。〈性格の悪さ〉で有意傾向が出た理由については、きょうだいの性格差によって、親がどちらかの子どもをひいきすることに繋がりやすいからではないかと考えられる。

次に劣等感項目ごとに比較対象（兄姉弟妹）×きょうだい差（自分低、自分高）で2要因混合の分散分析を行った。

〈統率力の欠如〉で交互作用がみられた（F (3.126)＝2.79, p<.05)。比較対象の主効果は有意でなかったが、きょうだい差の主効果が有意であった（F (1.126)＝4.45, p<.05)。下位検定の結果、兄群において、きょうだい差に有意傾向がみられ（F (1.126)＝3.17, p<.10)、自分低群の方が自分高群より得点が高かった。また、姉群においても、きょうだい差が有意であり (F (1.126)＝9.41, p<.01)、自分低群の方が自分高群より得点が高かった。〈学業成績の悪さ〉では、交互作用はみられなかったが比較対象の主効果が有意であった（F (3.126)＝3.40, p<.05)。多重比較の結果、兄群が姉群、妹群に比べて有意に得点が高かった (LSD＝3.09, p<.05)。きょうだい差には有意な主効果はみられなかった。〈性格の悪さ〉では交互作用ときょうだい差の主効果が有意傾向でみられ（順にF (3.126)＝2.51, p<.10、F (1.126)＝3.82, p<.10)、比較対象の主効果はなかった。下位検定の結果、兄群において、きょうだい差に有意傾向がみられ (F (1.126)＝2.79, p<.10)、自分低群の方が自分高群より得点が高かった。また姉群では、きょうだい差が有意であり（F (1.126)＝7.64, p<.01)、自分低群の方が自分高群より得点が高かった。そして自分低群において、兄群、姉群の方が弟群より得点が高かった。また、姉群のほうが妹群より得点が高かった。〈異性とのつきあいの苦手さ〉で、交互作用、比較対象の主効果には有意差はなかった。きょうだい差の主効果は有意で（F (1.126)＝3.99, p<.05)、自分低群の方が自分高群より得点が高かった。〈運動能力の低さ〉と〈身体的魅力のなさ〉、〈友達づくりの下手さ〉では、交互作用、主効果ともにみられなかった。

〈統率力の欠如〉、〈性格の悪さ〉、〈異性とのつきあいの苦手さ〉については、きょうだいよりも親に愛されたと認知している者のほうが、愛されなかったと認知している者より劣等感が低くなる結果となり、仮説が支持された。

〈統率力の欠如〉については、兄や姉と比較した場合、きょうだいより親に愛されなかったと認識した者は、劣等感がより高くなる傾向が示された。これは、兄、姉の方が自分よりも、年齢が上な分経験が豊富なことが多く、それが無意識の劣等感に繋がった為ではないかと考えた。また、〈学業成績の悪さ〉については、兄と比較した場合、姉や妹と比較するよりも劣等感が高くなることがわかった。高橋（1976）の研究では、姉のいる妹は、姉に対して対立的・分離的であるということがわかっているが、今回の結果からは学業に関しては兄との比較においても劣等感が高くなることが示唆された。〈性格の悪さ〉についても、兄や姉と比較した場合、きょうだいより親に愛されなかったと認識した者は、劣等感がより高くなる傾向にあった。また、きょうだいより親に愛されなかったと認識した者は、兄群が弟群より、そして姉群が弟群、妹群より劣等感が高かった。〈性格の悪さ〉においては、きょうだいよりも親に愛されていないと認識していても、比較対象によって劣等感の感じ方に大きく差が出るということ

が窺われた。

以上のことから、比較対象が兄・姉の方が、比較対象が弟・妹よりも劣等感を感じやすいという仮説が、部分的に支持された。

最後に、劣等感項目ごとにきょうだいとの年齢差（０～２歳、３～４歳、５歳以上）×きょうだい差（自分低、自分高）で２要因混合の分散分析を行った。

〈統率力の欠如〉について、交互作用、年齢差の主効果は有意ではなかった。きょうだい差の主効果は有意で（F (1.128)＝4.11, p<.05)、自分低群の方が自分高群より得点が高かった。〈性格の悪さ〉について、交互作用、年齢差の主効果は有意ではなかった。きょうだい差の主効果は有意傾向であり（F (1.128)＝3.84, p<.10)、自分低群の方が自分高群より得点が高かった。〈異性とのつきあいの苦手さ〉について、交互作用、年齢差の主効果は有意ではなかった。きょうだい差の主効果は有意であり（F (1.128)＝4.33, p<.05)、自分低群の方が自分高群より得点が高かった。〈友達づくりの下手さ〉について、交互作用、きょうだい差の主効果は有意ではなかった。年齢差の主効果が有意傾向でみられ（F (2.128)＝2.47, p<.10)、多重比較の結果、３～４歳群が０～２歳群と比べて有意に高かった（LSD＝2.61, p<.05)。〈運動能力の低さ〉、〈身体的魅力のなさ〉、〈学業成績の悪さ〉については交互作用、主効果ともにみられなかった。

これらのことから、〈統率力の欠如〉、〈性格の悪さ〉、〈異性とのつきあいの苦手さ〉において、きょうだいよりも親に愛されたと認知している者のほうが、愛されなかったと認知している者より劣等感が低いことが理解された。

〈友達づくりの下手さ〉については、０～２歳群より、３～４歳群のほうがより強く劣等感を感じやすいという結果となり「きょうだいとの年齢差が０～２歳群が他の年齢差群よりも劣等感が高い」という仮説は支持されなかった。これは、０～２歳差であると、中学校や高校できょうだいと一緒になることが多く、学校で比較されることが増える為、親の評価だけに影響されず、逆に、学校で比較されない３～４歳差のほうが他者からの比較を受ける機会が少ないため、親の評価に影響されるのではないかと考えた。

研究３： Over-protection得点のきょうだい差に関する分析

研究３の有効回答数156名のうち、「自分のOP得点－きょうだいのOP得点」＝０となるデータ17名を除いた139名において、「自分のOP得点－きょうだいのOP得点」が自分＜きょうだいの者（自分低群）と自分＞きょうだいの者（自分高群）に分け独立変数とし、劣等感項目ごとにt検定を行った。

その結果、〈統率力の欠如〉（t (1.137)＝12.64, p<.01)、〈性格の悪さ〉（t (1.137)＝2.79, p<.10)、〈異性とのつきあいの苦手さ〉（t (1.137)＝6.25, p<.05)、〈友達づくりの下手さ〉（t (1.137)＝10.49, p<.01）において、自分高群のほうが自分低群より有意に得点が高く、劣等感が高かった。

「きょうだいよりも自立的に育てられなかったと認知している者は、依存心が高く成功体験が少なくなる為、きょうだいに対して劣等感を感じやすい」という仮説はこれら４つの尺度では支持された。容姿や運動能力等、学校などで多くの人の評価に触れやすい尺度については、他者からの評価にも影響を受け、親の評価だけ

に縛られることがない。そのため、有意差が出なかったのだろうと考えた。

次に劣等感項目ごとに比較対象（兄姉弟妹）×きょうだい差（自分低、自分高）で2要因混合の分散分析を行った。〈統率力の欠如〉について、交互作用、比較対象の主効果は有意ではなかった。きょうだい差の主効果は有意であり（F (1.131)＝10.72, p<.01)、自分低群より自分高群のほうが、得点が高かった。〈学業成績の悪さ〉について、交互作用、きょうだい差の主効果は有意ではなかった。比較対象の主効果が有意であり（F (3.131)＝3.78, p<.05)、多重比較の結果、兄群が、姉群、弟群、妹群よりも有意に高かった。〈異性とのつきあいの苦手さ〉について、交互作用、比較対象の主効果は有意ではなかった。きょうだい差の主効果は有意であり（F (1.131)＝5.87, p<.05)、自分低群より自分高群の方が、得点が高かった。〈友達づくりの下手さ〉について、交互作用、比較対象の主効果は有意ではなかったが、きょうだい差の主効果には有意差がみられ（F (1.131)＝7.82, p<.01)、自分低群より自分高群の方が高かった。〈運動能力の低さ〉、〈身体的魅力のなさ〉、〈性格の悪さ〉については、交互作用、主効果ともにみられなかった。

〈学業成績の悪さ〉では、兄と比較した者は他のきょうだいと比較した者より劣等感が高くなる傾向がみられたが、その他の劣等感項目について比較対象の主効果は有意ではなかった。「比較対象が兄・姉の方が、比較対象が弟・妹よりも劣等感を感じやすい」という仮説は支持されなかった。

最後に、劣等感項目ごとに年齢差（0～2歳、3～4歳、5歳以上）×きょうだい差（自分低、自分高）で2要因混合の分散分析を行った。〈統率力の欠如〉について、交互作用、年齢差の主効果は有意ではなかった。きょうだい差の主効果は有意であり（F (1.131)＝11.54, p<.01)、自分低群より自分高群の方が、得点が高かった。〈性格の悪さ〉について、交互作用、年齢差の主効果は有意ではなかった。きょうだい差の主効果が有意傾向でみられ（F (1.131)＝3.62, p<.10)、自分低群より自分高群の方が、得点が高かった。〈異性とのつきあいの苦手さ〉について、交互作用、年齢差の主効果は有意ではなかった。きょうだい差の主効果は有意であり（F (1.131)＝6.28, p<.05)、自分低群より自分高群の方が、得点が高かった。〈友達づくりの下手さ〉においては、交互作用、年齢差の主効果は有意ではなかった。きょうだい差の主効果は有意であり（F (1.131)＝9.47, p<.01)、自分低群より自分高群の方が、得点が高かった。〈運動能力の低さ〉、〈身体的魅力のなさ〉、〈学業成績の悪さ〉については、交互作用、主効果ともにみられなかった。

年齢差の主効果はどの劣等感項目でもみられなかった。このことから、親からきょうだいよりも統制的に育てられたと認知していても、比較するきょうだいの年齢差によって劣等感が高くなったり低くなったりすることは無いと言える。「きょうだいとの年齢差が0～2歳群が他の年齢差群よりも劣等感が高い」という仮説は以上のことより支持されなかった。

まとめと今後の展望

本研究の結果をまとめたものをTable 1に示す。〈統率力の欠如〉〈異性とのつきあいの苦手さ〉について、養育態度のきょうだい差との関連がみられた。劣等感尺度の因子の中でも他者

に評価されにくいものであるため、親の養育態度と劣等感が結び付きやすいのではないかと考えた。逆に〈運動能力の低さ〉、〈身体的魅力のなさ〉では、養育態度のきょうだい差において有意差がみられなかった。運動能力や身体的魅力については、学校などで多くの人の評価に触れる為、親の影響が弱くなったことが推察される。つまり全体的に多くの人から評価を受けやすい項目のほうが親の影響が少なくなると考えられた。

本研究では、調査対象が男子32名、女子149名と男女差が大きく、それぞれの因子の人数も偏りがあった。今後は人数を均等にした上で研究を行いたい。

今回は親から受けたと認識している養育態度が劣等感にどのように影響するのかを検討したが、子どもの性格によって親の養育態度がどう変化するかなど相互作用について今後更なる検討をしたいと考えている。

参考文献

青木紀久代『過干渉の親・放任の親の心理』「児童心理」774　2002　1-9

藤永　保『同胞葛藤』藤永　保・仲　真紀子監修「心理学辞典」 2004　507

弘田洋二『きょうだい葛藤について』藤本修編「きょうだい―メンタルヘルスの観点から分析する―」ナカニシヤ出版 2009　39-44

及川裕子『親性の発達に関する研究』「埼玉県立大学紀要」7　2005　1-7

斎藤茂太『兄弟関係―無意識にあなたを支配するコンプレックス―』青春出版社　1975

佐々木正弘『劣等感と挫折感』藤永保編「こころの問題辞典」1984　61

高橋正臣『人格形成を規定する要因分析(Ⅲ)―Y.G検査に現れた出生の順位と同胞の性差の影響について』「大分県立芸術文化短期大学紀要」13　1976　1-5

高坂康雅・佐藤有耕『青年期における劣等感と競争心との関連』「筑波大学心理学研究」35　2008　41-48

Table 1　研究２と研究３の２要因分散分析（混合）結果のまとめ

	異性とのつきあいの苦手さ	学業成績の悪さ	運動能力の低さ	性格の悪さ	友達づくりの下手さ	統率力の欠如	身体的魅力のなさ
Care得点							
きょうだい差（自分低、自分高）比較対象（兄、姉、弟、妹）	自分低＞自分高	兄＞姉、妹		【兄との比較】自分低＞自分高 【姉との比較】自分低＞自分高 【自分低群】兄、姉＞弟 姉＞妹		【兄との比較】自分低＞自分高 【姉との比較】自分低＞自分高	
きょうだい差（自分低、自分高）年齢差（０～２歳、３～４歳、５歳以上）	自分低＞自分高			自分低＞自分高	0～2歳＜3～4歳	自分低＞自分高	
OP得点							
きょうだい差（自分低、自分高）比較対象（兄、姉、弟、妹	自分低＜自分高	兄＞姉、弟、妹			自分低＜自分高	自分低＜自分高	
きょうだい差（自分低、自分高）年齢差（０～２歳、３～４歳、５歳以上）	自分低＜自分高			自分低＜自分高	自分低＜自分高	自分低＜自分高	

不等号は劣等感得点の有意差を示す
【　】は交互作用の下位検定結果
OP：Over-Protection